HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	アルタイ型言語における準動詞と言いさしについて
Author(s)	風間, 伸次郎
Citation	北方言語研究, 2, 139-162
Issue Date	2012-03-26
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/49255
Type	departmental bulletin paper
File Information	09kazama.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

北方言語研究 2: 139-162（北方言語ネットワーク編，北海道大学大学院文学研究科，2012）

アルタイ型言語における準動詞と言いさしについて

風 間　伸 次 郎
（東京外国語大学）

0. はじめに

0.1. 本稿の目的

本稿の大きな目的は、単文の統語論が、複文の統語論や言いさしの成立に大きく関連していることを示すことにある。

Evans (2007) が指摘しているように言いさし（insubordination）にはエヴィデンシャルな意味やモーダルな意味を実現するものがある。例えば、次のような if 条件節による言いさしは、丁寧な要求というモーダルな意味を実現するようになる。

(1a) (I wonder) If you could give me a couple of 39c stamps please
(1b) If you could give me a couple of 39c stamps please,
(I'd be most grateful)　　（Evans (2007: 380)）

本稿では、このような点にも注目しつつ、諸言語における言いさしについて考察してゆくことにする。

0.2. 研究対象とする言語

アルタイ型言語とは、亀井・河野・千野編 (1996: 499) による用語で、系統的なグループを指すのではなく、類型的なタイプを指す用語である。本稿では、修飾語が常に被修飾語に先行し、中でも特に述語動詞が文末にくるような言語を指すものとする。したがってアルタイ型言語には、本稿で扱う言語以外の多くの言語を含み得る。しかし、ここでは筆者のよく知る以下の言語に限定する：すなわちアルタイ諸言語、朝鮮語、ニブフ語、日本語、である。これらの言語は地理的に主に中央アジアから北東アジアに分布する言語である。系統的にみれば、まず朝鮮語、ニブフ語、日本語の系統は不明である。アルタイ諸言語はチュルク諸語、モンゴル諸語、ツングース諸語の３グループからなるが、その相互の系統的な関係は未だ明確ではない。３つのグループはさらにその内部に多くの言語を含んでいるが、そのグループ内部の諸言語間での系統関係は明確である。本稿におけるアルタイ諸言語の例は、主にツングース諸語のうちのナーナイ語によるものとする。

後でみるように、本稿で扱う言語は大きく２つ、もしくは３つのグループに分けることができる。朝鮮語とニブフ語では、形容詞が動詞とほとんど同じ変化を見せるのに対し、アルタイ諸言語の形容詞は名詞と同じような形態的振る舞いを示す。古代日本語においてもやはり形容詞はより名詞的な性格を持っていたものと考えられる。現代日本語での形容詞的意味を示す語群は２つのグループに分かれている（3.1. で後述）。以下では朝鮮語とニブフ語のような言語を「形容詞動詞型の言語」、アルタイ諸言語のような言語を「形容詞名

詞型の言語」、と呼ぶことにする。

0.3. アルタイ型言語における準動詞

ここでは、アルタイ型言語における準動詞の特性について述べるとともに、本稿が独自に用いる用語や枠組みについて説明する。

準動詞（形）という用語は、ふつう定形でない動詞の諸形態、すなわち動名詞（gerund）、不定詞（infinitive）、分詞（participle）の総称として用いられる。ロシア語などを考慮すると、これにさらに副動詞（converb）が加わる。しかし、これは英語をはじめとするヨーロッパの多くの言語（以下では便宜上「ヨーロッパ型」言語と呼ぶ）の実情に即した枠組みであって、本稿の対象であるアルタイ型言語の実情には合っていない。すなわち、下記のような諸点において異なっている。

・ヨーロッパ型言語の準動詞は、形態的には一種の品詞転換を行って形成されるのに対し、アルタイ型言語の準動詞の諸形は動詞の屈折体系の中に位置づけられる。

・アルタイ型言語の準動詞の諸形は（言語や語尾にもよるが）、準動詞の形になっても、項構造をはじめとする動詞の統語的機能をよく維持する。

・名詞を修飾する従属要素は、その独立性の高さに関わらず、常に分詞的な機能をもつ動詞形によって形成される。したがって関係代名詞が存在せず、定動詞によるいわゆる関係節を形成しない。節と句の境界は明確ではない。この分詞的な機能の動詞形は、記述によって動詞的名詞／形動詞（verbal noun）、分詞（participle）、などと呼ばれてきたが、いずれも適当ではない。先に述べたように、この動詞形は動詞の屈折体系の中に位置づけられる。したがって以下では、形・動詞形（adnominal (verb) form、グロスは ANF）と呼ぶ。なお、アルタイ諸言語や古代日本語では、この動詞形が名詞的機能をも併せ持つ。そのような場合には、以下形・名・動詞形（adnominal-nominal (verb) form、グロスは ANNF）と呼ぶ。

・アルタイ型言語では、副動詞の種類が多く、その使用頻度もきわめて高い。先に述べたように、副動詞も動詞の屈折体系の中に位置づけられる。したがって以下では、副動詞（converb）とは呼ばず、もっぱら副・動詞形（adverbial (verb) form、グロスは ADVF）と呼ぶ。

・独立性の高い副詞的な従属節は、ヨーロッパ型の言語においては独立の語である接続詞によって形成されることが多いのに対し、アルタイ型言語ではもっぱら上記の副・動詞形か、動詞に後続する付属語による。他方、アルタイ型言語では接続詞が未発達であり、その使用頻度は低い。

・アルタイ型の個々の言語においてもっとも出現頻度の高い副・動詞形は、物語的連鎖から原因・理由に至るまでの広い意味を実現する。そしてしばしば同主語の連接も異主語の

連接も共に許容する。したがって等位接続（coordination）と従位接続（subordination）は連続体をなしている。アルタイ型の言語において、真の等位接続の文はわずかにしか存在しない。なお、日本語においてもっとも出現頻度の高い副・動詞形であるテ形に関して、その特徴と上記のような状況を詳しく述べた論文に、Ono (1993) がある。

1. 形容詞名詞型の言語：アルタイ諸言語

アルタイ諸言語では、動詞はきれつづきによって屈折し、定動詞形（finite (verb) form）か、形・名動詞形か、副・動詞形かのいずれかの形となる。すなわち、文を終止するか、終止しなければどのような機能で次の語へ続くのか、ということを動詞に表示するのであり、これを「きれつづき」という名の一つの文法カテゴリーとみるわけである。

定動詞形はさらにモダリティやテンスにより分化し、形・名・動詞形および副・動詞形もいくつかの形を持つ。ここではまずツングース諸語のうちの１つであるナーナイ語についてみてゆくことにする。

表１：ナーナイ語の動詞の活用

定動詞形	直説法	現在	*-ra(n)*
		過去	*-ka*
		未来	*-ǰaan*
	命令法	現在	*-roo*
		未来	*-xaar*
	その他（省略）		
形・名・動詞形	現在		*-(ri)i*
	過去		*-xan/-kin*
副・動詞形	同時		*-mi*
	先行		*-raa*
	条件		*-očia*
	その他（省略）		

（なおこの表での文法は大幅に簡略化してある。例えば、母音調和や同化・脱落による異形態を示していない。諸形式の機能のラベルも大雑把なものである。以下、他の言語についても同様である。ナーナイ語の文法について、詳しくは風間 (2010a) などを参照されたい）

すでに述べたように、アルタイ諸言語に共通する特徴として、形容詞は名詞同様に振る舞う、ということがあげられる。現在・肯定であれば、名詞述語文・形容詞述語文にコピュラは不要である。なお下記の例文は、作例しコンサルタントに確認していただいたものと、筆者収集のテキストによるもののいずれかである。

(2a) *təi* *nai* *aloosimǰi.*
that person teacher
「その人は先生だ。」

(2b) *təi* *nai* *uləən.*
that person good
「その人は良い。」

過去や否定では存在の動詞「いる、ある」がコピュラ的な機能で用いられる。

(3a) *təi* *nai* *aloosimǰi* *bi-čin.*
that person teacher be-ANNF.PST
「その人は先生だった。」

(3b) *təi* *nai* *uləən* *bi-čin.*
that person good be-ANNF.PST
「その人は良かった。」

(4a) *təi* *nai* *aloosimǰi* *bi-əsi.*
that person teacher be-ANNF.NEG.PRS
「その人は先生じゃない。」

(4b) *təi* *nai* *uləən* *bi-əsi.*
that person good be- ANNF.NEG.PRS
「その人は良くない。」

名詞を修飾する際には、名詞と形容詞で違いが生じる。なお名詞の所有構造は主要部標示型であり、ナーナイ語をはじめとする多くのツングース諸語には属格がない。

(5a) *aloosimǰi* *daŋsa-ni*
teacher book-3SG.POSS
「先生の本」

(5b) *uləən* *daŋsa*
good book
「良い本」

形容詞は名詞的で、次の例に見るように対格などの格の接辞を直接とって曲用する。

(6a) *aloosimǰi-wa* *ičə-xən.*
teacher-ACC see-ANNF.PST
「先生を見た。」

(6b) *uləəm-bə* *ičə-xən.*
good-ACC see-ANNF.PST
「良いのを見た。」

動詞の形・名・動詞形は、３つの機能を持つ。以下順に、文末の定動詞として機能している例、名詞修飾として機能している例、名詞的に機能している例を示す。

(7a) *təi* *nai* *tutu-i.*
that person run- ANNF.PRS
「その人は走る／走っている。」

(7b) *təi* *nai* *tutu-xən.*
that person run- ANNF.PST
「その人は走った。」

(8a) *tutu-i* *nai*
run- ANNF.PRS person
「走る人／走っている人」

(8b) *tutu-xən* *nai.*
run- ANNF.PST person
「走った人／走っていた人」

(9a) *mii* *təi* *nai* *tutu-i-wə-ni* *ičə-xəm-bi.*
I that person run- ANNF.PRS-ACC-3SG see- ANNF.PST-1SG

「私はその人が｛走るのを／走っているのを｝見た。」

(9b) *mii təi nai tutu-xəm-bə-ni ičə-xəm-bi.*
I that person run- ANNF.PST-ACC-3SG see- ANNF.PST-1SG
「私はその人が｛走った／走っていた｝のを見た。」

ここでも存在の動詞をコピュラ的に用いることができる。なお *bi-* 「ある、いる」の形・名動詞の形は不規則形である。

(10) *təi nai tutu-i bi-či-ni.*
that person run- ANNF.PRS be- ANNF.PST-3SG
「その人は走っていたのだった。」

このように、形・名動詞の統語的性格は、形容詞のそれとよく対応している。
これに対し、副・動詞形は基本的に文末に立つことができず、主節なしで文を形成することもできない。つまり言いさしの文を作ることもできない。

(11) **təi nai tutu-mi / tutu-rəə / tutu-učiə-ni.*
that person run-SIM.ADVF / run-ANT.ADVF / run-COND.ADVF
「その人が 走って／走ってから／走ると。」

もしも副・動詞形が文末に立つ場合には、語順逆転表示要素（***=da / =də***）を必要とする。

(12) *əsi=tənii ənə-xən, piktə-ji kuu-rəə=**də**.*
now=CLT go-PST child-REF.SG nurse-ANT.ADVF=CLT
「（その女は）今行った、自分の子供に授乳してから、だ。」

母音の長さは異なるものの、この語順逆転表示要素は累加を示す形式に由来するものと考えられる。

(13) *səəpə sıŋakta-nı=**daa** bi-i, gormaxon=**daa** bi-i,*
sable fur-3SG.POSS=CLT be-ANNF.PRS rabbit=CLT be-ANNF.PRS
*xaı=**daa** xəm bi-i.*
what=CLT all be-ANNF.PRS
「クロテンの毛皮もある、ウサギ（の）もある、何でも全てある。」

副・動詞形は、主節の述語にかかってゆくことがその機能であるのだから、副・動詞形で文が終わったり、さらには主節も存在せず副・動詞形だけで文を作ったりすることは副動詞本来の機能と矛盾する。したがって言いさしが起こらないのはいわば当然ともいえる。しかしアルタイ諸言語に副・動詞形による言いさしが全く存在しない、というわけではない。例外的に存在する言いさしについては、この節の最後に提示する。
定動詞の頻度は低く、その使用は、もっぱら直接に会話している場面での１，２人称の

主語の行為に限られる。３人称主語の行為では、きわめてまれだが、話し手がその行為を直接目撃した場合に用いられることがある。すなわち、実相の観点から言えば、直接体験の行為に限られる。

(14) *sii* *sia-ka-si?* *ii,* *mii* *sia-ka-i=a.*
you eat-PST-2SG yes I eat-PST-1SG=CLT
「あなたは食事したか？　ああ、私は食べた。」

(15) *ǝi-du* *ao-ra=tanii.*
this-DAT sleep-PRS=CLT
「ここで寝ているのか！」

他方、同じツングース諸語の言語でも、エウェン語東方言などになると事情はやや異なっている。以下のエウェン語東方言の例文は Malchukov (1995: 17) による（グロス等を若干改変した)。やはり形・名動詞形に形容詞的、名詞的、述語的、の３つの用法があることがわかる。

(16) *ǝm-čǝ* *bǝj* *gөөn-ø-ni.*
come-ANNF.PST person say-FNT.NONFUT-3SG
「やって来た人は言った。」

(17) *ǝtikǝn* *ǝm-čǝ-wǝ-n* *haa-ra-m.*
old.person come-ANNF.PST-ACC-3SG know-FNT.NONFUT-1SG
「おじいさんが来たのを（私は）知った。」

(18) *bii* *ǝm-čǝ* *bi-sǝ-m.*
I come-ANNF.PST be-FNT.NONFUT-1SG
「私は来たのだった。」

Malchukov (1995: 17) によれば、(18)のような述語的用法において、主語が３人称非未来の場合には、コピュラ *bi-* は省略される。そしてコピュラなしで過去形として機能する。

ここまではナーナイ語における状況とほとんど変わりがない。しかし筆者のこれまでの研究によれば、エウェン語東方言において形・名動詞形で文が終わることはきわめてまれであり、しかも形・名動詞形で終わる文において、形・名動詞形は動詞的な性格を大きく失っており、(18)のような文は名詞述語文としての性格を強く示す（詳しくは 風間 (2010b: 24-26)を参照されたい)。

筆者はここで次のような歴史的変遷を提案したい。形・名動詞形の述語用法は、はじめ形容詞の名詞的性格を基盤にして成立した。その後その使用範囲が広がり、その用法を確立した。すなわち、エウェン語東方言のような状況のほうがより古い段階の状況を反映し

ており、ナーナイ語のような状況はより新しい段階の状況を反映しているものと考える。このような歴史的変遷は、後述するように日本語でも起きたと考えられている（3.2 で後述）。

ナーナイ語にみてきたような上記の諸特徴は、モンゴル諸語、チュルク諸語においても同様にあてはまる。すなわち、形容詞は名詞的性格を持ち、形・名動詞形で文が終わることは一般的であるが、副・動詞形による言いさしはまれである。ただし、筆者はモンゴル諸語とチュルク諸語の全てについての記述をよく確かめたわけではないので、今後の精査が必要である。少なくともいくつかの言語では言いさしと見えるものが散見される。ここではトルコ語とモンゴル語、さらに満洲語の例をあげておく。

トルコ語では条件の副・動詞形が、ペルシア語から借用した副詞「〜であればよいのに」の助けを借りて、次のような反実仮想の意の言いさしによる文を形成する。

(19) *keşke* *daha* *çok* *para-m* *ol-sa.*
if.only more much money-1SG be-ADVF.COND
「もっと私にお金があればなあ！」（Göksel and Kerslake (2005: 359)）

モンゴル語でも同様な表現が可能であるという（以下の２文はコンサルタント（1988 年生まれ、övörxangaj 出身、転字はキリル文字の一般的なものによった）。

(20) *ug* *n'* *nadad* *möngö* *baj-san* *bol.*
more 3SG I.DAT money be-PST if
「もっと私にお金があればいいのに（なあ。）」

あまり安定した表現ではないが、副・動詞形で言いさした次のような文も可能であるという。

(21) *ter* *dandaa* *l* *uurla-ǰ* *baj-dag-ijg* *n',* *med-seer* *baj-ǰ,*
he always emph get.angry-ADVF be-ANNF-ACC 3sg know-ADVF be-ADVF
(tege-ǰ *xel-e-x* *xereg=güj* *baj-san* *jum).*
be.like.that-ADVF say-E-ANNF necessity=not be-ANNF thing
「あの人がいつも怒ってばかりいることを知っていて・・・
（（だから）あんな風に言う必要は無かったんだよ）。」

このように強いモダリティ的意味を持った言いさしは、やはりいろいろな言語において成立しやすいようである。したがってこのようなタイプの言いさしはさらに多くの言語に見出される可能性がある。後で見るように朝鮮語や日本語でも類似した言いさしの表現が観察される。

津曲（2000: 140）は満洲語に、条件の副・動詞形 *-ci* による言いさしがあることを詳しく論じている。

(22) *bi umai* *šolo* *baha-rakū,* *šolo* *baha-ci* *esi* *ji-ci.*
I entirely free.time find-NEG free.time find-ADVF.COND of.course come-ADVF.COND
「私は全く暇が得られない、暇ができればもちろん来る。」

これは、副詞 *esi* 「もちろん」との呼応によって生じるもので、「もちろん～する」というような強いモダリティ的意味を伴う。上記の例文(22)にみるように、他の事態との対比が感じられる。津曲 (2000: 141, 145) は古代日本語における *=koso* による係り結び (4.2 で後述) との類似を指摘している。

2. 形容詞動詞型の言語：朝鮮語とニブフ語

朝鮮語でもやはりきれつづきによって動詞が活用するが、定動詞形、形・動詞形、副・動詞形の他に、名・動詞形がある。なお朝鮮語のローマ字表記は河野 (1979[1947]: 96-97) にしたがっている。

表 2：朝鮮語の動詞の活用

定動詞形	直説法	非過去	*-(ny)nda*
	目撃法		*-dera*
	命令法		*-ra*
	勧誘法		*-ja*
	その他の法（省略）		
形・動詞形	過去		*-(y)n*
	非過去		*-nyn*
	過去継続		*-den*
	未来		*-(y)r*
名・動詞形	名・動詞形 I		*-(y)m*
	名・動詞形 II		*-gi*
	名・動詞形 III		*-ji*
副・動詞形	同時		*-go*
	先行		*-‘a / -‘e*
	条件		*-(y)myen*
	条件・逆接		*-gedyn*
	理由		*-(y)nigga*
	逆接		*-nyndei*
	その他（省略）		

（朝鮮語には待遇法による区別があり、一連の疑問形もあって、動詞の活用はきわめて複雑な体系をなしている。ここでは待遇法のうちの下称の語尾に限った。機能的なラベルは動詞につく場合を基準に名づけている。）

朝鮮語では、形容詞は動詞的な変化を示す。過去形になる時にはそれ自体が過去形の語尾を取り、名詞を修飾する際には形・動詞形にならなければならない。

(23a) *gy* *saram=‘yn* *sensaing-nim-‘i‘ia.*
that person=TOP teacher-mister-COP
「その人は先生だ。」

(23b) *gy* *saram=‘yn* *‘ieibb-‘e.*
that person=TOP beautiful-ADVF.ANT
「その人はきれいだ。」

(24a) *gy* *saram=‘yn* *sensaing-nim-‘i-‘ess-‘e.*
that person=TOP teacher-mister -COP-PST-ADVF.ANT
「その人は先生だった。」

(24b) *gy* *saram=‘yn* *‘ieibb-‘ess-‘e.*
that person=TOP beautiful-PST-ADVF.ANT
「その人はきれいだった。」

(24c) *gy* *saram=‘yn* *‘o-ass-‘e.*
that person=TOP come-PST-ADVF.ANT
「その人は来た。」

(25a) *sensaing-nim* *caig* (25b) *joh-‘yn* *caig* (25c) *‘ilg-‘yn* *caig*
teacher-mister book good-ADN.PST book read-ADN.PST book
「先生の本」 「良い本」 「読んだ本」

動詞の形・動詞形は文末に立つことがない。名詞的に用いることもできないので、その際にはきわめて意味範囲の広い名詞 *ges*「もの、事」を連体修飾することによって表現する。

(26) *na=nyn* *gy* *saram=‘i* *darri-go* *‘iss-nyn* *ges=‘yr*
I=TOP that person=NOM run-ADVF.SIM be-ANF.NONPST thing=ACC
bo-ass-‘e.
see-PST-ADVF.ANT
「私はその人が走っているのを見た。」

副・動詞形の多くは文末に立つことができない。

(27) *gy saram=‘i darri-go.
that person=NOM run-ADVF.SIM
「その人が走って。」

しかし副・動詞形のうちの、先行副・動詞形 *-‘a / ‘-e* はごくふつうに文末に立ち、その使用頻度はかなり高い。これは目下へ向けての話し言葉ではもっとも default な形であり、目上に対しても、これに終助詞 *=‘yo* を加えた形式が広く用いられる。決してモダリティ的に有標な形式ではない。

(24c)（再掲）
gy saram=‘yn ‘o-ass-‘e.
that person=TOP come-PST-ADVF.ANT
「その人は来た。」

(28) gy saram=‘i {darri-‘e / darri-‘e=‘yo} .
that person=NOM {run-ADVF.ANT / run-ADVF.ANT=CLT}
「その人が｛走る／走ります｝。」

このような先行副・動詞形 *-‘a / ‘-e* で終わる文は、朝鮮語学においてパンマル（banmal, 日本語訳：「半言」）と呼ばれている。これは中期朝鮮語には存在しなかったが、近世語から発生してきたもので、もともと *-‘a / ‘-e* による副・動詞形の後ろに何らかの語尾（コピュラの *-‘ida* である可能性もある）が後続していたものであったが、これが省略されることにより現在の形で使われるようになったことが考えられるという（辻 (1997: 64)）。

さらに、条件や理由の副・動詞形は、倒置や省略のプロセスを経て、言いさしが行われることもある。

(29) ‘irdyng ha-r-tei-ndei. gy saram=‘i darri-mien.
first.prise get-ANF-DN-ADVF.ADVS that person=NOM run-ADVF.COND
「一等をとるはずだよ。その人が走れば。」

(30) ‘uri=ga ‘igi-e. gy saram=‘i darri-nigga.
we=NOM win-ADVF.ANT that person=NOM run-ADVF.CAUSAL
「（リレー競技などをしている場面で）オレたちが勝つ。あの人が走るから。」

朝鮮語の言いさしについては、さらにコーパスから調査を行った。使用したコーパスは『21 世紀世宗計画第 1 段階成果物（1988-2000）－研究・教育用現代国語均衡コーパス』(1,000 万語節（文節）、うち書きことばは約 90%、話し言葉は 10%）である。

調査対象とした形式は、下記の表 3 にある 7 形式である。菅野他編 (1988: 1023-1025) によれば、副・動詞形のうち、文末終止にも用いられる形には *-ndei, -nyndei, -dendei, -gedyn, -‘a /*

‘-e の５形式がある。これに上述の *-(y)myen* と *-(y)nigga* を加えて検索した。

表 3：朝鮮語における言いさしのコーパス調査結果

	-(y)myen	*-(y)nigga*	*-ndei*	*-nyndei*	*-dendei*	*-‘a / ‘-e*	*-gedyn*
副・動詞形での意味	条件	理由	逆接	逆接	逆接	先行	条件
話し言葉	71	378	547	576	24	3,395	81
書き言葉	38*	980	574	470	95	6,451	416

-(y)myen の用例数はきわめて多いので、書き言葉のコーパスのうち、さらに小説のものに限定して調査した。一見、話し言葉での言いさしは少ないように見えるが、コーパスの規模が 1：9 であるので、話し言葉の数値はこの９倍に相当する。

まず *-ndei, -nyndei, -dendei* の３形式は、いずれも逆接を示すものだが、接続する品詞の違いや、アスペクト的な違いによって、これらの３形式が使い分けられている。言いさしで用いられた場合には、非難、反論、感嘆などのモーダルな意味を持つことが多い。

(31) *giengci=ga mai‘u joh‘y-ndei.*
view=NOM very good-ADVF
「景色がとても良いねえ。」（油谷他編 (1993: 332)）

(32) *gyre-nigga ga-ji mar-ra gyrai-ss-nyndei.*
be.so-CAUSAL go-ADVF stop-QUOT be.so-PST-ADVF
「だから行くなって言ったのに。」（油谷他編 (1993: 424)）

-gedyn は、条件、逆接などの意味の副・動詞形であるが、副詞節を形成する用法は近年衰退しつつあるという。下記の(33)のような例は *-(y)myen* によって言い換えることが可能であり、*-(y)myen* による表現のほうが現在多用されているという。

(33) *bi-ga gyci-gedyn ga-ja.*
rain-NOM finish-ADVF.COND go-COHOR
「雨がやんだら行こう。」（油谷他編 (1993: 73)）

しかし、文末で用いられる次のような例は話し言葉で現在も盛んに用いられているという。文末での機能は、「他の事実の根拠を示す」ことである。

(34) *'oai* *gyre-n* *ge* *sa-ss-'e?* *'emeni=ga* *johaha-si-gedyn.*
why be.so-ANF thing buy-PST-ADVF.ANT mother=NOM like-HONOR-ADVF.COND
「どうしてそんなの買ったんだい？」 「母が好きなんだよ。」
（油谷他編 (1993: 73)）

次にニブフ語の例をとりあげる。ニブフ語において、形容詞はやはり動詞的な活用を示す。

服部 (1988: 1413) によれば、ニブフ語には説述形（verbal adverb）という動詞の形態があり、次のような人称変化を示す。

表 4：ニブフ語の説述形

	非未来		未来	
	普通形	完了強調形	普通形	完了強調形
1sg, 1pl, 2pl, 3pl	*-t*	*-dot*	*-n*	*-non*
2sg, 3sg	*-r*	*-ror*	*-r*	*-ror*

説述形は、副・動詞的に働く形である。しかし、２つ以上の主語が現れる場合には、そのそれぞれに対応する動詞が説述形になり、文末の動詞も説述形となる。

(35) *Ni* *caj* *ra-t* *wi-nt.*
I tea drink-ADVF.1SG go-FNT
「私はお茶を飲んで行った。」（服部 (1988: 1413)）

(36) *ci* *caj* *ra-r* *Ni* *damx* *da-t* (< *ra-t*).
you tea drink-ADVF.2SG I cigarette drink.1SG
「君はお茶を飲んだし、僕はタバコを吸った。」（服部 (1988: 1413)）

人称変化する点や、原則として複数の主語の場合に用いられる点などは異なっているが、このようなニブフ語の説述形は、次のような点で朝鮮語の *-'a / -'e* による言いさしとよく似た面を示している。

・継起的な連鎖に用いられるもっとも default で頻度の高い動詞形であること（例文(35)）。
・言いさしに多くみられるような有標なモダリティ的意味を伴わないこと（例文(35), (36)）。

3. 形容詞折衷型の言語：日本語

3.1. 現代日本語

日本語の動詞もやはりきれつづきによってまず３つの形に分かれる。定動詞はモダリティやテンスによってさらに分化する。

表 5：日本語の動詞の活用

定動詞形	直説法	非過去	*-(r)u*
		過去	*-(i)ta*
	命令法		*-e/-ro*
	勧誘法		*-(y)oo*
	その他の法（省略）		
形・（名・）動詞形	非過去		*-(r)u*
	過去		*-(i)ta*
副・動詞形	同時		*-(i)nagara*
	先行		*-(i)te*
	条件 I		*-(r)eba*
	条件 II		*-(i)tara*
	その他（省略）		

形容詞的な意味の語類には２種類あり、１つのグループに属する語は否定や過去においてほぼ名詞に近い変化を示すが、もう一方のグループに属する語はきれつづきやテンスに関して名詞とも動詞とも異なる変化を示す。以下では、日本語教育などでの使用にならい、前者をナ形容詞、後者をイ形容詞と呼ぶことにする。ナ形容詞では終止形と連体形が異なる形を取るが（例文(37b)と(40b)）、イ形容詞では同じ形となる（例文(37c)と(40c)）。

(37a) *kare=wa* *sensee=da.*
he=TOP teacher=COP
「彼は先生だ。」

(37b) *kare=wa* *genki=da.*
he=TOP fine=COP
「彼は元気だ。」

(37c) *kare=wa* *kasiko-i.*
he=TOP clever-PRS
「彼は賢い。」

(38a) *kare=wa* *sensee=da-tta.*
he=TOP teacher=COP-PST
「彼は先生だった。」

(38b) *kare=wa* *genki=da-tta.*
he=TOP fine=COP-PST
「彼は元気だった。」

(38c) *kare=wa* *kasiko-katta.*
he=TOP clever-PST
「彼は賢かった。」

(39a) *kare=wa* *sensee=zya* *na-i.*
he=TOP teacher=CLT not.exist-PRS
「彼は先生じゃない。」

(39b) *kare=wa* *genki=zya* *na-i.*
he=TOP fine=CLT not.exist-PRS
「彼は元気じゃない。」

(39c) *kare=wa kasiko-ku na-i.*
he=TOP clever-ADVF not.exist-PRS
「彼は賢くない。」

(40a) *sensee=no hon* (40b) *genki-na hito*
teacher=GEN book fine-ADN person
「先生の本」 「元気な人」

(40c) *kasiko-i hito*
clever-ADNF.PRS person
「賢い人」

(41a) *sensee=o mi-ta.* (41b) *?genki=o mi-ta. / genki-na=no=o mi-ta.*
teacher=ACC see-PST fine=ACC see-PST / fine-ANF=DN=ACC see-PST
「先生を見た。」 「?元気を見た。 / 元気なのを見た。」

(41c) **kasiko-i=o mi-ta. / kare=ga kasiko-i=koto=o mi-ta.*
clever=ACC see-PST / he=NOM clever-ANF=event=ACC see-PST
「*賢いを見た / 彼が賢いことを見た。」

形・(名・) 動詞形と終止形は同形である。したがって、形・(名・) 動詞形が文末に立つ、と分析することも可能である。しかし本稿では、日本語の記述文法の伝統にしたがって別形式として扱う。

(42a) *kare=wa hasir-u.* (42b) *kare=wa hasit-ta.*
he=TOP run-NONPST he=TOP run-PST
「彼は走る。」 「彼は走った。」

(43a) *kare=wa hasir-ana-i.* (43b) *kare=wa hasir-ana-katta.*
he=TOP run-NEG-PRS he=TOP run-NEG-PST
「彼は走らない。」 「彼は走らなかった。」

(44a) *hasir-u hito.* (44b) *hasit-ta hito.*
run-ANF.NONPST person run-ANF.PST person
「走る人」 「走った人」

形・(名・) 動詞形は直接に格をとって名詞のように振る舞うことはできない。形・(名・) 動詞形は、まず形式名詞を修飾することによっていったん名詞句を形成しなければならず、その名詞句には格の要素がつくことができる。

(45a) *kare=ga hasir-u=o mi-ta.
he=NOM run-ANF.NONPST=ACC see-PST

/ kare=ga hasir-u=no=o mi-ta.
/ he=NOM run-ANF.NONPST=DN=ACC see-PST
「私は彼が走るのを見た。」

(45b) *kare=ga hasit-ta=o mi-ta.
he=NOM run-ANF.PST=ACC see-PST

/ kare=ga hasit-ta=no=o mi-ta.
/ he=NOM run-ANF.PST=DN=ACC see-PST
「私は彼が走ったのを見た。」

できごとを表す場合に限り、一部の慣用的で文語的な表現では、形・(名・) 動詞形に直接に格の要素がつく例も観察されるという (堀江・プラシャント 2009)。以下の例(46)〜(48)は、堀江・プラシャント (2009: 154)に基づき若干改変したものである。これは次の 3.2. にみる古代日本語の特徴の残存とみることができる。

(46) ie=o kaw-u=ni atat-te syakkin=o s-ita.
house=ACC buy-ANF=DAT confront-ADVF debt=ACC do-FNT.PST
「家を買うにあたって借金をした。」

(47) eiga=ni ik-u=yori ne-te i-ru=hoo=ga i-i.
film=DAT go-ANF=than sleep-ADVF be-ANF=DN=NOM good-FNT
「映画に行くより寝ている方がいい。」

(48) sono kaisya=wa toosan#s-uru=ni itat-ta.
that company=TOP bankruptcy#do-ANF=DAT go-PST
「その会社は倒産するに至った。」

コピュラをこの形・(名・) 動詞形の後ろに続けることはできず (ただし一部可能な方言 (長野方言など) もある)、形式名詞などを形動詞形の後ろに後続させることによって名詞化してからコピュラを続ける必要がある。

(49a) *kare=wa hasir-u=da.
he=TOP run-ANF.NONPST=COP
「*彼は走るだ。」

(49b) kare=wa hasir-u=no=da.
he=TOP run-ANF.NONPST=DN=COP
「彼は走るのだ。」

(50a) **kare=wa hasit-ta=da.*
he=TOP run-ANF.PST=COP
「*彼は走っただ。」

(50b) *kare=wa hasit-ta=no=da.*
he=TOP run-ANF.PST=DN=COP
「彼は走ったのだ。」

日本語の言いさしについて、コーパスを検索して調べたところ、その頻度は下記のようであった。使用したコーパスは国立国語研究所の BCCWJ（「現代日本語書き言葉均衡コーパス」）であり、このうちの書籍（約 3,000 万語）のうちの文学作品、国会議事録（約 490 万語）、Yahoo!知恵袋（約 520 万語）から検索を行った。白川 (2009) は言いさしの形式として、*-(i)te, -(r)eba, -(i)tara, =kara, =kedo, =noni, =si* を扱っている。今回の調査ではこのうち、*-(i)te* をはずし、*=ga* を加えた 7 形式を検索対象とした。なお *-(r)eba, -(i)tara* に関しては、「？」が後続するもののみを検索した。

表 6：現代日本語における言いさしのコーパス調査結果

	-(r)eba	*-(i)tara*	*=kara*	*=ga*	*=kedo*	*=noni*	*=si*
従属節の意味	条件	条件	理由	逆接	逆接	逆接	累加
文学作品	15	80	1,964	935	616	376	372
国会議事録	0	0	406	223	1	2	9
Yahoo	98	133	1,562	2,599	921	262	1,080

言いさしは口語的な性格が強いため、国会議事録での用例は少ない。同じ逆接でも、*=ga* は *=kedo, =noni* よりフォーマルな性格を持つので、国会議事録での用例が多くなっている。

以下はコーパスから得た言いさしの各形式の用例である。どの形式も聞き手に対するモーダルな意味を実現していることがわかる。

(51) *zya, yame-tya-eba?*
then cease-PRF-ADVF.COND
「(同情してもらおうとして夫に話すと意見を言われてしまうと言う人に対して)
じゃ、やめちゃえば？」

(52) *tamani=wa nakami=de eran-de mi-tara?*
sometimes=TOP inside=INS chose-ADVF .ANT try-ADVF.COND
「(外見で恋人を選んで失敗ばかりしているという人に対して）たまには中身で選んでみたら（どうか）！？」

「いいんじゃない（か）？」の省略であると考えられる例がほとんどである。文学では、「(私は）どうすれば（いいんだろうか）？」、「犯人もまた墜落したのであれば（どうだろうか）？」のような例も存在するが、大部分の例はやはり２人称への働きかけ（推奨）である。補助動詞「〜て みる」と共起する例(53)が多い。

(53) *ki=ni* *nar-u=nara* *sirabe-te* *mi-tara!?*
anxious become-ANF.NONPST=COND research-ADVF.ANT try-ADVF.COND
「気になるなら調べてみたら！？」

「どう？」の省略と考えられる例がほとんどである。やはり２人称への働きかけ（推奨）で、補助動詞「〜て みる」と共起する例も多い。何らかの条件や理由を提示してから、対応策を提示する、というケースが多くみられる。

(54) *ganbat-te!* *watasi=mo* *ganbar-u=kara.*
try.one's.best-ADVF.ANT I=CML try.one's.best-FNT=CAUSAL
「がんばって。私もがんばるから。」

=kara による言いさしでは、その主節にあたる内容が前の文で説明されていることがほとんどであった。したがって倒置に近く、文法化はあまり進んでいない。客観的に理由を述べている文も多く、モーダルな意味はそれほど強くない。

逆接に関しては、*=kedo* と *=noni* をとりあげる。

(55) *karate* *yat-te* *i-ru* *oyazi* *doo* *omow-u?*
karate do-ADVF.ANT be-ANF.NONPST middle.age how think-FNT.NONPST
「空手やっているオヤジどう思う？」

kakkoi-i=to *omo-imas-u=kedo.*
cool-FNT=QUOT think-POLT-FNT.NONPST=ADVS
「カッコいいと思いますけど。」

この例のように、疑問を発した相手が否定的な答えを予想していると考えた場合に、答える側が *=kedo* を用いている例が観察される。

(56) *ur-u=ki=ga* *na-i=nara*
buy-ANF=intention=NOM not.exist-ANF=COND
syuppin *si-na-kya* *i-i=noni.*
put.at.auction do-NEG-COND good-ANF=ADVS
「売る気がないなら出品しなきゃいいのに。」

=noni による言いさしも、モーダルな意味はそれほど強くない。主節の内容が文脈から判断される場合に用いられている例が多い。

=si に関しては、近年若年層においてその使用が拡大し、新しい用法が生じていると報告

されている。朴 (2005: 31-32) によれば、次のような用法の例がある。

①不満や相手に対する拒否を示す。

(57) *watasi=mo yar-u=si.*
I=CML do- FNT.NONPST =CML
「(あんたは自分ばかりが大変な仕事をやるかのようにぼやいているが) 私もやるし。」
(なおこの表現は逆に相手を激励するような場面でも使用可能であろう［筆者注］。)

(58) *mi-te na-i=si.*
see-ADVF.ANT not.exist- PRS =CML
「見てないし。」

(59) *ik-ita-ku na-i=si.*
go-OPT-ADVF not.exist-PRS=CML
「行きたくないし。」

②自慢する気持ちを示す。

(60) *sit-te-ru=si.*
know-ADVF.ANT- FNT.NONPST =CML
「知ってるし。」

③単に現在の状態やできごとを言う。

(61) *terebi mi-ta=si.*
television watch-PST=CML
「テレビ見たし。」

3.2. 古代日本語

現代日本語と異なり、古代日本語では、多くの動詞および助動詞で定動詞形と形・名・動詞形は異なった形をとっていた。

表 7：古代日本語における定動詞形と形・名動詞形

	四段	上二段・下二段	上一段・下一段	カ変	サ変	ラ変	ナ変
定	*kak-u*	*tasuk-u*	*mi-ru*	*k-u*	*s-u*	*ar-i*	*sin-u*
形・名	*kak-u*	*tasuk-uru*	*mi-ru*	*k-uru*	*s-uru*	*ar-u*	*sin-uru*
意味	書く	助ける	見る	来る	する	ある	死ぬ

現代日本語とは異なり、形・名動詞はかなり名詞的に使われる。すなわち、事物を表していても直接に格の要素をとることもできる。

(62) *matu=ni* *yuki=no* *hur-i#kakar-i=tar-i=ker-u=wo*
pine=DAT snow=NOM.GEN fall-ADVF#powder-ADVF=PRF-ADVF=PST-ANNF=ACC
or-ite
break-ADVF.ANT
「松に雪の降りかかったのを折って」（大和物語）

(63) *kore-ra=no* *hito=no* *waraf-u=wo* *kik-ite*
this-PL=NOM.GEN person=NOM.GEN laugh-ANNF=ACC hear-ADVF.ANT
「この人々が笑うのを聞いて」（土佐日記）

さらに文中の何らかの要素を強調の付属語（*=zo, =namu*）によって強調した場合や、疑問文の焦点となる語に疑問を示す付属語（*=ya, =ka*）がついた場合には、形・名・動詞形で文を終える、という一種の呼応現象があった。国語学・日本語学では伝統的にこれを「係り結び」と呼んでいる。

(64) *yama=no* *oku=ni=mo* *sika=zo* *nak-u* *nar-u.*
mountain=GEN.NOM bottom=DAT=CML deer=EMPH call-FNT hear(EVD)-ANNF
「山の奥にも鹿が啼くのだ。」（千載集 1148）

その後、形・名動詞形による文終止が一般化するにつれ、もとの終止形が衰退し、現代日本語のような状況となった。ただし琉球語をはじめとする諸方言には、定動詞形と形・名動詞形の対立や係り結びを残しているものもある。

さらに、係り結びにはもう 1 種類あったが、これは副・動詞形からの言いさしとして成立したものである。伝統的に已然形と呼ばれている形（*-(r)e*）は、強調の付属語 =koso と共に、奈良時代にはもっぱら確定条件や逆接を示す副詞節を形成していた。

(65) *hito=koso* *sir-an-e* *matu=ha* *sir-u=ram-u.*
person=EMPH know-NEG-ADVF-ADVS pine=TOP know-FNT=INFER-FNT
「人は知らないだろうが、松は知っているだろう。」（万葉集 145）

平安時代になって、言いさしの形が一般化した。

(66) *tir-u=yara* *tir-an-u=yara,* *arasi=koso* *sir-e.*
(flower.)drop-FNT=or drop-NEG-FNT=or storm=EMPH know-ADVS
「散るのか散らないのかは嵐こそが知っている。」（閑吟集 27）

他の強調の付属語（*=zo, =namu*）が滅んでしまったのに対し、*=koso* は現代語にも生き残っている。条件や理由の節につきやすいという性格を持っていたが、次のような例にその残存が観察される。

(67) *kimi=o* *sinzi-reba=koso* / *kimi=o* *sinzi-te* *i-ru=kara=koso*
you=ACC believe-COND=EMPH / you=ACC believe-ADVF be-FNT=CAUSAL=EMPH
kimi=ni *sono* *sigoto=o* *makase-ta=n=da.*
you=DAT that work=ACC leave-PST=DN=COP
「{君を信じればこそ／君を信じているからこそ} 君にその仕事を任せたんだ。」

奈良時代以来の、逆接の従属節中に起きる例も観察される。

(68) *kono* *kyuuri=wa* *katati=koso* *waru-i=keredo,* *azi=wa* *yo-i.*
this cucumber=TOP form=EMPH bad-FNT=ADVS taste=TOP good-FNT
「このキュウリは形こそ悪いけれど、味は良い。」（庵他 (2001: 349)）

他に =to=mo, =ba=ya なども言いさしによる表現を発達させたものと考えることができる。

3.1. でみたように、現代日本語の形容詞はそれ自体が変化するために、動詞に近い性格を持つものと考えられている。しかし、次のような点では、古代日本語の形容詞はむしろ名詞に近い性格を示す。

・過去形は、*ar-*「ある」の助けを借りて、のちに発達してきたものである（ex. *taka-katta* < *taka-ku at-ta* 「高かった」）。
・複合語を形成する際には語幹が用いられ、名詞による複合語の形成と類似している（ex. *haya-asi* 「早足」, *ama-asi* 「雨足」）。
・奈良時代には語幹により名詞を直接修飾した例がある（ex. *mizika#yo* 「短い夜」）。現代でも宮古島の方言にその残存がある。

現代語でも、語幹のみ（＋促音）による感動用法があり、これは近年勢いを増している（ex. 「さむっ！」）。

形容詞名詞型の言語では、準動詞形も形容詞的機能と名詞的機能を併せ持つ、すなわち形・名動詞形を持つ、という仮説が正しいとすれば、古代日本語の形容詞も動詞的ではなく、むしろ名詞的に機能する語類であったと考えるほうが自然だろう。

4. 結論

上記のような諸言語の検討より、本稿では次のような結論 (i)〜(iv) を提示する。

(i) 形容詞名詞型の言語（アルタイ諸言語など）では形・名・動詞形で言い切ることがごくふつうに行われるのに対し、形容詞動詞型の言語（ニブフ語、朝鮮語）では、形・動詞形

で言い切ることができない。
(ii) 形容詞名詞型の言語において、形・名・動詞形で文を終えるか、定動詞形（finite verb form）で文を終えるかの違いは、実相（evidentiality）の違いに関わっていることがある。
(iii) 形容詞名詞型の言語では、副・動詞形によって文を終止することはあまり一般的ではない。他方、形容詞動詞型の言語には、文を終止することができる副・動詞形が存在し、その出現頻度もかなり高い。
(iv) 一般に副・動詞形で文を終止させる場合、その文は各種のモーダルな意味を伴うことが多い。しかし、形容詞動詞型の言語において文を終止する副・動詞形は、モダリティに関して default の意味で実現する。

(i)について。複文の統語論は、単文の統語論を基礎に成り立っているものと考えられる。したがってある言語で、形・動詞形の統語的性格が形容詞の統語的性格に類似していることは、当然予想されることであろう。印欧諸語でも、その多くは基本的に形容詞名詞型の言語であり、その分詞は形容詞的にも名詞的にも働くことがみられる。アルタイ諸言語の場合、肯定・現在ではコピュラが不要なため、形・名・動詞形が文末の形として発達する素地がさらに十分に用意されていたということができる。こうした背景のもとで、ナーナイ語や日本語では形・名・動詞形で終わる文が発達してきたものと考えられる。

(ii)について。形・名・動詞形で文を終えるということは、動詞述語文を名詞述語文の枠に投入して表現するものと捉えることができる。これは英語の分裂文を思い起こしてみればわかりやすい。そして名詞述語文 A is B. は、既知で特定の A について、それが恒常的に B であるという話し手の知識や判断を示すのがふつうであろう。したがって眼前に起きる状況をそのまま述べることのできる動詞文とは実相の点で異なってくることが予測できる。古代日本語の係り結びは、強調や疑問、など情報構造の変化と強い関連を持っている。なお、このような情報構造と話し手の判断の関係や、その体系的な整理に関しては、また稿を改めて論じたいと考えている。

(iii)について。朝鮮語とニブフ語には、特にモーダルな意味を持たず、出現頻度の高い副・動詞形による文の終止が観察された。形容詞動詞型の言語でこのような副・動詞形による文の終止が発達する必然的な理由はない。偶然この 2 言語に生じたことなのか、何らかの理由があるのか、今後さらに検討していく必要がある。

(iv)について。満洲語の *-ci* （例(22)）、朝鮮語の *-gedyn* （例(34)）、古代日本語の *-e* （例(66)）は、次のような点でよく類似している。
・（確定）条件や逆接の形式から発達した言いさしである。
・対比の文脈で、理由を述べることによって聞き手に働きかけるモーダルな意味を実現する。

上記の諸仮説が通言語的に妥当であるかを検証するために、今後さらに他の言語における状況を検討していく必要がある。

謝辞

朝鮮語に関して御教示下さった東京外国語大学総合国際学研究院の伊藤英人先生、朝鮮語のコーパス調査をし、さらに貴重な御教示を下さったハンピルナムさん、日本語のコーパス調査をし、さらに貴重なご教示を下さった佐藤雄亮さんにここに記して感謝申し上げたい。本誌の査読者からも、多くの貴重なコメントをいただいた。本稿をより意味のあるものに推敲できたのは全くこの査読のおかげであり、深く感謝申し上げたい。しかし本稿における誤謬は全て筆者の責任に帰するものである。

Abbreviation

ACC: accusative
ADN: adnominal (form)
ADVS: adversative
ADVF: adverbial verb form
ANF: adnominal verb form
ANNF: adnominal-nominal verb form
ANT: anterior
CAUSAL: causal
CLT: clitic
COHOR: cohorative
CML: cumulative
COND: conditional
COP: copula
DAT: dative
DN: dummy noun
E: epenthetic
EMPH: emphatic
EVD: evidential
FNT: finite
GEN: genitive
HONOR: honorific
INFER: inference
INS: instrumental
NEG: negative
NOM: nominative
NONFUT: nonfuture
NONPST: nonpast
OPT: optative
PL: plural
POLT: polite
POSS: possession
PRF: perfect
PRS: present
PST: past
QUOT: quotative
REF: reflexive
SG: singular
SIM: simultaneous
TOP: topic

= 付属語境界
複合語における語境界

参考文献

朴仙花 (2005) 「接続助詞で終わる日本語の言いさし表現－対人関係を中心に－」名古屋大学大学院国際言語文化研究科修士論文

Evans, N. (2007) Insubordination and its uses. *Finiteness*, ed. by Irina Nikolaeva, 361-431. Oxford: Oxford University Press.

Göksel, A. and C. Kerslake (2005) *Turkish: A Comprehensive Grammar*. New York: Routledge.
服部健 (1988) 「ギリヤーク語」亀井孝・河野六郎・千野栄一編『言語学大辞典 第 1 巻』 東京：三省堂
堀江薫・プラシャント パルデシ (2009) 『言語のタイポロジー』東京：研究社
庵功雄・高梨信乃・中西久美子・山田敏弘 (2001) 『中上級者を教えるための日本語文法ハンドブック』 白川博之監修 東京：スリーエーネットワーク
亀井孝・河野六郎・千野栄一編 (1996) 『言語学大辞典 第 6 巻 術語編』 (「言語類型論」の項) 東京：三省堂
菅野裕臣・早川嘉春・志部昭平・浜田耕作・松原孝俊・野間秀樹・塩田今日子・伊藤英人共編 (1988) 『コスモス朝和辞典』東京：白水社
風間伸次郎 (2010a) 「ナーナイ語文法概説」『ナーナイの民話と伝説 10』ツングース言語文化論集 48 府中：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
風間伸次郎 (2010b) 「ツングース諸語の接辞 -ča について」『アジア・アフリカの言語と言語学』5. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
河野六郎 (1947) 「朝鮮語ノ羅馬字轉寫案」『Tôyôgo Kenkyû』2, 河野 (1979) 所収
河野六郎 (1979) 『河野六郎著作集 I』東京：平凡社
Malchukov, A. L. (1995) *Even: Languages of the World/Materials* 12. München - Newcastle: Lincom Europa.
南不二男 (1974) 『現代日本語の構造』東京：大修館書店
Ono, Yoshiko (1993) Does Japanese have coordination? In Ebert, Karen (ed.) *Arbeiten des Seminars für Allgemeine Sprachwissenschaft der Universität Zürich*.
白川博之 (2009) 『「言いさし文」の研究』東京：くろしお出版
辻星児 (1997) 『朝鮮語史における「捷解新語」』岡山：岡山大学文学部
津曲敏郎 (2000) 「満洲語動詞語尾 -ci の文末用法と -cina について」 *Altai Hakpo*（アルタイ学報）10:139-150. ソウル：韓国アルタイ学会
油谷幸利・門脇誠一・松尾勇・高島淑郎 編 (1993) 『朝鮮語辞典』 東京・ソウル：日本・小学館 韓国・金星出版社共同編集

Verbals and Insubordination in Altaic-type Languages

Shinjiro KAZAMA
(Tokyo University of Foreign Studies)

This paper aims to show that intra-clausal syntax is crucially related to inter-clausal syntax and the development of insubordination. It also examines Evans's (2007) claim that the insubordination phenomenon often pertains to evidential and modal meaning.

The term "Altaic-type language" (Kamei, Koono, and Chino 1996: 499) refers to a

typologically coherent group of languages rather than to a genetically related group of languages. In this study, I use this term for the group of languages where the modifier always precedes the head, and most importantly, the predicate comes sentence-final.

The languages examined in this study can be classified into two or three groups: on one hand, Korean and Nivkh have "verbal adjectives" (i.e., adjectives that behave like, or can be treated as a subclass of, verbs); on the other, the Altaic languages have "nominal adjectives." Old Japanese is classified as the latter, but Contemporary Japanese constitutes yet another group, or a language that has particular adjectives for one class of lexemes and nominal adjectives for the other.

The conclusions of the present study are as follows:

(i) Languages that have nominal adjectives, including Altaic-type languages, can end a sentence with the adnominal-nominal (verb) form, whereas languages that have verbal adjectives, including Nivkh and Korean, cannot.

(ii) In languages that have nominal adjectives, where a sentence may be terminated with the adnominal-nominal (verb) form or with the finite verb form, evidentiality may be a crucial factor that determines this choice.

(iii) In languages that have nominal adjectives, it is not common for the adverbial (verb) form to terminate a sentence. By contrast, in languages that have verbal adjectives, there do exist adverbial (verb) forms that may terminate a sentence with high frequency.

(iv) In general, when an adverbial (verb) form is used to terminate a sentence, the sentence carries a certain modal feature. However, in languages that have verbal adjectives, this does not hold true, and the sentence carries an unmarked modal feature.

（かざま・しんじろう　kazamas@tufs.ac.jp）